

群馬の自然

特集 群馬の天然記念物

No.164

2012 春

特定非営利活動法人 (NPO)

群馬県自然保護連盟

URL <http://www5.wind.ne.jp/shizen/>

e-mail shizen@dan.wind.ne.jp



エナガ 巣立ち雛

ニホンカモシカ

片山 満秋

ニホンカモシカは、本州(中国地方を除く)・四国・九州に分布し、昭和9(1934)年に天然記念物、昭和30(1955)年に「特別天然記念物」に指定されました。この特別天然記念物は「国宝」に相当する存在です。

天然記念物が特別天然記念物に格上げ指定されたのは、それまでの狩猟によって極端に個体数が減少し、種の存続が危ぶまれる状態になったためです。この狩猟禁止の時期と、国の政策の一環として実施された国有林の大量伐採と大規模な「拡大造林」とが時期的に重なりました。森林の大量伐採(それもほとんど皆伐的)は日当たりと見晴しの良い広い草地を作り出しました。また造林された樹種はスギやヒノキが主であって、それら幼樹は枝先の葉を特に好んで摂食するニホンカモシカへの大量な餌供給になったのです。

このような狩猟禁止(「天敵」の不在)、生息場所の拡大、餌の大量供給はニホンカモシカの急激な個体数増加をもたらし、造林木に

特集 群馬の天然記念物

目次

表紙	エナガ 巢立ち雛	水村 聡子	1
特集	群馬の天然記念物		
ニホンカモシカ	片山 満秋	2	5
ヤマネ	関 敏雄	5	7
天然記念物の蝶	松村 行榮	7	8
袈裟丸山の庚申草	吉田 龍司		9
下郷の大クワ	里見 哲夫	9	10
瀬林の漣痕	飯島 静男	10	11
植物歳時記(57) ワラビ	吉田 龍司	12	13
図鑑の内と外 植物私記③ コナラ	佐鳥 英雄	14	16
群馬の地質 年の始めに衿を正す	飯島 静男	16	17
残された自然の中で(156)			
観音山鳥日誌⑤ ニュウナイスズメ	谷畑 藤男	17	18
植物をミクロで見る(5) ウマスゲ	青木 雅夫		18
アベマキの分布に一考	里見 哲夫	18	19
タヌキは種子散布者?	谷畑 藤男		19
平成24年度行事予定			
自然観察会・自然環境保全地域の自然観察と清掃活動			20
自然保護対策委員会視察予定・自然観察教室			21
事務局日誌(164)			21
事務局だより			22



大きな食害が発生しました。そこで昭和54(1979)年に3庁(文化庁・林野庁・環境庁(現在の環境省))はニホンカモシカ保護と被害の防止を図るための「三庁合意」と称される基本方針をまとめました。その結果としてニホンカモシカの保護地域が設定されました。この保護地域は現在までに青森県から和歌山県にかけて13か所設定されています。この保護地域内では保護するが、保護地域外では個体数調整(捕獲・駆除)するという内容です。

群馬県には「越後・日光・三国山系保護地域(六合村・中之条町・みなかみ町・片品村)」と

「関東山地保護地域(上野村)」の2か所があります。全国的にみても、これらの保護地域はいずれも険しい山岳地帯で、ほとんどが林業に適さない場所です。これら保護地域におけるニホンカモシカの生息頭数は「越後・日光・三国山系保護地域」が1〜2頭/㎢(2008)、「関東山地保護地域」が0.6〜0.9頭/㎢(2009)でした。「関東山地保護地域」の群馬県側は上野村の三国山(埼玉県と長野県の県境)です。この三国山には調査に入ったことがありますが、確実にニホンカモシカと判定できる糞や食痕などは確認できませんでした。三国山の北側(神流川源流域)ではニホンジカの糞や樹木の皮はぎ跡などが多く見られました。この保護地域は全国的にも生息頭数が少ないという結果が継続して得られています。

林業の盛んな長野県や岐阜県などでは、昭和55(1980)年代から、保護地域以外の場所でも個体数調整(という狩猟)が行われています。群馬県は平成17(2005)年に「保護管理計画策定」の公聴会が開かれました。県自然環境課が主催し関係団体や関係市町村と野鳥の会も出席しましたが、この公聴会で管理計画策定に反対意見を述べたのは私のみでした。反対理由は、1.ニホンカモシカは日本

固有種として学術上貴重な種であり、特別天然記念物であること。2.造林木や農作物への食害は別の方法で回避すべきと考える。と文書を提出し説明もしました。」

群馬県では平成18(2006)年に策定された「カモシカ保護管理計画」に基づいて個体数調整が始まり、吾妻郡嬭恋村はキャベツの、利根郡昭和村は野菜の食害を防止するために、それぞれ年に約10頭が捕獲・処分されています。

ニホンカモシカは、一般になわばり(決まった行動圏)を持ち単独行動が主です。2〜4頭のグループを作ることもあります。5頭以上はごく稀とのことです。子連れ雌や繁殖期の雌雄が一緒にいることはあっても、通常は単独で生活します。

私は昭和52(1977)年に檜俣川の調査の際に、林の中で初めてニホンカモシカに会いました。ある距離まで近づくと逃げて行き、離れた場所に立ち止まってこちらを見えています。それで降いろいろな場所で見えますが、いずれも単独であり同じような行動をとっていました。

ニホンカモシカの角は雌雄ともに生後約3か月で生え始め、角には15歳の冬からリング

状の成長線(角輪・かくりん)が生じるので、この角輪に1を加えると年齢を知ることができます。今までに20個の角輪をもつ角を見たことがありますが、雌24歳、雄22歳という記録があるそうです。

歯は片側の上下に門歯(前歯)と犬歯がなく、小白歯と大白歯が3個ずつあり、下顎には門歯が3個と犬歯が1個で小白歯と大白歯は上顎と同じ3個ずつあります。摂食方法は、柔らかな木の葉や芽などはむしり取り、小枝などは奥歯(小白歯と大白歯)の間に挟み込んで押し切ります。いずれにせよ歯の様子からして、かみ切った断面は不揃いです。

ニホンカモシカは、ニホンジカのような樹木の皮はぎは、一般にしないようです。しかし餌不足になると樹木の皮をかじることもありますが、そのかじり跡はニホンジカとは異なり小さいので区別ができるようです。以前、三重県で飼育されていたニホンカモシカによる大きな皮はぎ跡を見たことがあります。これは飼育のストレスによる異常行動だのとこのことでした。ニホンカモシカも角を樹木にこすりつけて「角とぎ」をしたり、目の下にある分泌腺をこすりつける行動もとりますが、これらの痕もニホンジカほど大きくないのが一般

的です。

ニホンカモシカが好んで摂食する植物はイチイ(アブラギ)です。イチイが混在する林ではまずこのイチイから食うようです。ニホンカモシカによる樹木の食害が出て困っているという話が出た地域で「イチイを交えて植林したらどうか」と提案したことがあります。あらかじめイチイを外側に植林して食わせ、内側の植林木を保護するという方法です。しかし実施したのか、その結果や効果などについては確かめていません。

ニホンカモシカ以上に個体数を激増したのがニホンジカです。現在は日本各地においてこのニホンジカによる食害の方が大きくなっています。ニホンカモシカはなわばりをもつて単独行動をしますが、ニホンジカは集団で行動し繁殖力が大きく、環境に対する順応性が高いことがその理由でしょう。足尾や日光地域のニホンカモシカ生息地でニホンジカが増えてきたら、単独行動をするニホンカモシカが姿を消したとのことで、他の地域でも同様の現象がみられるようです。

ニホンジカが餌にする植物は幅が広く、草や木の枝や葉の他に落葉も食いますし、有毒植物のトリカブトも餌にします。尾瀬ヶ原で

調査をしたところミツガシワ、ミズバショウやサワギキョウなど約60種を餌にし、有毒植物とされるドクゼリも食っており、順応性の大きさを逞しさには驚かされました。

ニホンジカとニホンカモシカの摂食方法はやや似ていますが、大きく樹皮をはぐのがニホンジカです。またニホンカモシカは同じ場所に糞(いわゆる「ため糞」)をしますが、ニホンジカの糞は散らばっているため一般には区別出来ます。しかし両種は採食植物や行動様式が類似しているため、加害状況から両種を厳密に区別するのは困難な場合があるので、糞便(腸粘膜細胞が含まれている)のDNA解析が用いられるようになっていきます。

体毛を鋭角に曲げるとニホンジカの毛は折れてしまいましたが、ニホンカモシカは折れません。ニホンカモシカの皮膚は厚く体毛は密生しており、簡単には折れたり抜けたりすることがなく保温も良いので、以前、山に登る人達は約30cm四方のニホンカモシカの毛皮を「尻皮」と称して尻にぶら下げていたものです。これが「いっぱしの登山家」スタイルで、格好よく見えた時期がありました。

ところで、保護地域外で個体数調整(殺処分)されたニホンカモシカは、所定の手続き

を済ませて流通(売買)することになります。群馬県では角付き頭部、胃(第一胃)内容物、生殖器などのサンプルを回収して調査します。頭骨は県立自然史博物館に収蔵されます。(この個体数調整には補助金が出ますし、毛皮や肉は売買されます。)

ニホンカモシカの食害問題の発生は、森林の一斉伐採(皆伐)と植林にも関係がありました。しかし当時(拡大造林)の植林木も生長したために食害の影響は減少したようです。現在のニホンカモシカによる食害問題の発生は、山林の大規模開発に伴う農地の造成と関係があるのではないかと思っています。ニホンカモシカの生息地(山間地)が開発と農地造成がされた場合、生息地を離れて新しい生息場所を見つける習性の乏しい彼らは、"もともとの"行動場所(なわばり)から離れず、そこにある植物(栽培作物)を餌にするのではないのでしょうか。一時的に追い払っても、そこは自分の行動範囲(なわばり)だからすぐに戻ってくるでしょう。危険を察知し回避する能力に乏しいようにも見える動物です。

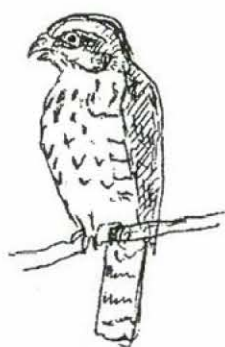
全国的にはニホンカモシカよりニホンジカによる食害が問題になっております。日光中禅寺湖畔(東岸)のウラジロモミは皮はぎで枯

死したために大木はありません。赤城山でも特に小沼の湖畔にあるサラサドウダンや覚満淵のマユミは皮はぎで枯れが目立っています。

またニホンジカが食わないマルバダケブキの見事な群落がスキー場で見られます。赤城山覚満淵ではシカの侵入を防ぐネットを張り巡らしています。

丹沢などや各地で下草のササや低木などがニホンジカに食いつくされて樹林が一変した場所が多くあり、日本アルプスのお花畑にも入り込んでいるとのこと。ある本に、このニホンジカ駆除に自衛隊の力を借りたらどうか、というつぶやきも聞いたと書かれました。本気になってニホンジカの食害対策に、ニホンカモシカと同様に"予算"を付けて取り組む必要があると思います。

そろそろニホンカモシカに「特別天然記念物」としての処遇をする時期がやってきているのではないかと考えています。



ヤマネ

関 敏雄

ヤマネは、ネズミ目ヤマネ科に属し、一種の日本固有種で昭和50年(一九七五)に国の天然記念物に指定された。また環境省、群馬県のレッドデータブックでは準絶滅危種にリストアップされ保護されている。北海道を除く本州、四国、九州の森林に広く分布している。

口先から尾の付け根まで約8cm、毛のふさふさ生えた5cmほどの尾をもち、全長約13cm。体重18g位。クリクリした可愛い目、足は短く、額から尾の付け根まで背筋に沿って黒線が走っていて、冬眠をする。

夜行性だが冬眠前は昼間も行動している。ほとんど樹上で暮らし、通常は単独で生活している。平成15年から倉渕村誌(現高崎市倉渕町)の哺乳類調査を田口秀雄さん、原島早苗さんと3人で行い、平成16年6月の夜間調査では、樹洞にいた個体をファイバースコープで調べたところ、腹の大きなメスが巣材のヒノキの樹皮にくるまって寝ていた。翌日見



冬眠中のヤマネ

たら6頭の子が生まれていた。体長1.5cmくらいで、まだ目もあかず、毛の生えていない赤子は背中黒線もなく、3日後には毛は生えていないが皮膚に黒い線が現れ、3週間後は親と一緒に近くの木から木へと移動していた。細い枝の移動時は必ず枝の下側を移動する。背中の黒い線は枝の一部に見え、枝に逆さまになることが保護色の役目をしているといわれている。天敵はヘビ、テン、フクロウなどで調査用の巣箱からヤマカガシが出てきたこ

ともあった。

ヤマネはテリトリーや決まった巣は持たず、食物となる昆虫や木の実を求めて広い範囲を行動している。食性調査は3回実施した。

8月、巣の前にカマキリ、コオロギ、チョウ、ガ、バッタ、カブトムシ、トンボなどの昆虫や、アシナガバチの巣を置いたところ、カブトムシ以外はすべて食べてあった。アシナガバチの巣は壊して幼虫はすべて食べ尽くし、他の昆虫は腹の部分だけを食べて、羽と肢は巣材に使っていた。

9月はバナナ、ナス、キュウリ、サツマイモ、カボチャ、キウイフルーツ、チーズ、小魚の煮干を家から持って行った。サツマイモは2ヶ所に歯型があつたが食さず、バナナ、キウイフルーツ、チーズは夢中で食べた。半分に切ったキウイフルーツは人間がスプーンで掬ったように皮だけがきれいに残してあった。が、他の食物は食べてなかった。

10月初旬には付近にある木の実でヤマボウシ3個、アケビ1個、ガマズミ、イチイ、ナナカマド、クリ、ドングリ(ミズナラ)、マツボツクリ、熟したカキを半分に切って置いた。ヤマボウシとアケビは皮と種、カキは皮とヘッタと種を残しほとんど食べてあり、冬眠前は大食

になることが分った。が、他は食べなかった。

10月中旬頃から冬眠の準備に入る。この頃になると体重は2倍の30gを超す。冬眠場所は樹洞、朽木の中、落ち葉の下、土中(体を樹皮で覆う)、雪の中や小鳥用の巣箱、人家の戸袋、押入れ等で、袈裟丸山でお世話になった山仕事しているおじいさんは、杉林の雪上で、10cmくらいの丸いスギの樹皮を拾い、ほぐしたら中から「冬眠中の丸くなったコダマネズミが出てきた」と言っていた。袈裟丸ではヤマネのことをコダマネズミ(小玉鼠)と呼んでいる。このことから適当な冬眠場所がない時はスギの木枝にも冬眠の巣を作ると考えられる。このヤマネを家に持ち帰り、コタツの上で転がしていたら1時間くらいで動き出し、外の雪の上に置いたらまた丸くなったという。また伐採した倒木の洞から出てきたヤマネを「2、3回見たことがある」と言っていた。外気温が10℃以下になると冬眠を始める。37℃くらいあった体温は環境温度に合わせ5℃近くまで下げて代謝量を少なくし、更に手足を内側に、尾は顔につけて体を球状にし、体表面からの放熱を少なくしている。この姿から小玉鼠と呼んでいるのかも知れない。暖かくなる4月頃までは仮死状態にいる。

繁殖期は5〜7月で、1〜7頭の子を産む。

ヤマネもムササビと同じく交尾栓をもつ。繁殖用の巣材は苔類、スギやヒノキの柔らかい樹皮、ダケカンバの樹皮が巣箱いっぱい詰まっていた。仮眠用の巣材はほんの少し体が隠れるくらいだ。妊娠期間は3週間くらい。生後約25日で親離れをする。生まれたての子をファイバースコープで観察していたが、ネコと同じく人が見ていると母親は子を殺すという。この時「カルシウムの多い餌を与えると大丈夫だ」ということを袈裟丸のおじいさんから聞いたので、カマキリやトンボ、チョウをたくさん与えたところ6頭の子はすべて巣立った。

5年間の倉渕村誌調査で調査用巣箱を5ヶ所で各10個ずつ計50個を目の高さに掛け、5月から10月まで2週間に一度確認に行った。利用した巣箱の向きはどちらの方角でも変わりなかったが、ヤマネは尾根に掛けた10個すべて利用しなかった。小さな沢沿いや窪地のスギやヒノキのある雑木林の利用が多かった。他に巣箱を利用していたのはコガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ヒメネズミ、モモンガ、カマドウマ、ハチである。

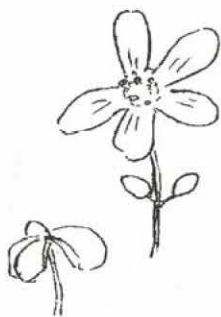
ある時巣箱を開けたら蜂の巣があり、驚いて

逃げたが追いかけられ刺されたことがあった。

鳥類の巣材は苔にシカやカモシカの毛が混ざり、ヒメネズミは落葉や緑色の葉。モモンガはヒノキの柔らかい樹皮が巣箱一杯に詰まっていた。巣箱の隙間からそれとなく分かる。ヤマネとモモンガは巣材が同じで、ヒノキの樹皮が巣箱一杯に詰まっていたのでヤマネだと思い巣材を少しづつ取っていたら、出入り口の穴からモモンガが飛び出し巣箱を掛けている木を登り滑空していった。

村誌の調査では34頭(同じ個体があるかも知れない)のヤマネを確認したが、夜行性で体が小さく、動きが素早いので観察には大変苦労した。

他にも戸倉ダム、川古ダム、平川ダム、栗原川ダム、八ツ場ダム、榛名町誌で群馬県野生動物研究会が赤城山、四万、袈裟丸山、日光市栗山、足尾で巣箱調査を実施したが、足尾以外、ヤマネの生息は総て確認できた。今年には谷川岳での調査を予定している。



天然記念物の蝶

松村 行栄

群馬県では5種のチョウが天然記念物に指定されています。その中でヒメギフチョウは里山のチョウですが、残りの4種(ミヤマシロチョウ、ミヤマモンキチョウ、オオイチモンジ、ベニヒカゲ)は亜高山帯に棲息するチョウなので馴染みが少ないかも知れません。ヒメギフチョウについては、本誌上でも何回か紹介しましたので、今回は残りの4種について現在の棲息状況を紹介します。

4種の中で最も数が少ないのがオオイチモンジです。あとの3種と一緒に1977年に天然記念物に指定され、利根郡川場村などで少数が確認されていました。しかし、1987年の片品村での確認から後の記録が無く、既に絶滅したと考えられています。でも隣の栃木県日光市では少ないながら確認されているので、群馬県でもまだ諦めずに探してみる必要があります。

最も数が多いのはベニヒカゲです。時には動物の糞に沢山のチョウが群れているのを見

ることができません。地理的遺存種といわれ、氷河期には広い地域に棲息していたのが、気候が暖かくなったので山の頂上付近だけにとり残されてしまったチョウです。長い間、離れた場所ですんでいるため、山ごとに翅の模様などが少しずつ違っています。群馬県でも至仏山、四阿山、湯の丸山や野反湖などにいますが、至仏山のベニヒカゲは少し大きいようです。ベニヒカゲも、現在、数が多いと言っても安心はできません。三国山の山頂付近では、ササが繁茂し食草のスゲ類を覆ってしまい、ほとんど見る事ができなくなっていました。

ミヤマモンキチョウは四阿山などの浅間山系で見ることができます。食草は山のブルーベリー、クロマメノキです。ササの繁茂はミヤマモンキチョウにも影響を及ぼしています。樹高の低いクロマメノキを覆い、雌のチョウが産卵するのを妨害しています。また湯の丸山では、牧草として導入したアカツメクサが勢力を拡大し、アカツメクサを食草とするモンキチョウがミヤマモンキチョウの棲息地域まで勢力を拡大しています。ミヤマモンキチョウはまだ、緊急の保全を必要とするまで数は減っていませんが、早い時期に環境整備など

の対策を開始しないと急激に数が少なくなる危険性があります。

現在、4種の中で最も絶滅の危機が高いのがミヤマシロチョウです。湯の丸山周辺だけで見ることができ、メギを食べています。1980年頃は栈敷山や角間山でも見ることができましたが、現在は湯の丸山のごく限られた地域でしか見ることができません。幼虫が集団で巣を作り冬越しをする珍しいチョウです。2009年の調査では、この巣が4つしかありませんでした。幸い2010年は29、2011年は76と、ここ数年は増加傾向ですが、いつ絶滅してもおかしくない状況は続いています。ミヤマシロチョウの場合、数が少なくなった最も大きな原因はササの繁茂と草原の森林化にあるようです。数が増えてきたところで、棲息地域を拡大する対策をとる必要があります。

さて、ミヤマシロチョウを例にチョウの保全を考えてみます。まず、群馬県指定の天然記念物は、天然記念物を所轄している教育委員会と協力して、文化財保護法に沿った保全対策を検討することが必要です。また、ミヤマシロチョウの場合は、棲息場所が国指定天然記念物の湯の丸レンゲツツジ群落の中にありま

す。従って保全活動の実施には文部科学省とも連絡を取らなくてはなりません。ミヤマシロチョウが減少した根本原因は湯の丸山で放牧が行われなくなったことです。湯の丸山周辺は新治牧(みはりのまき)といって中世から放牧が営まれてきた場所だそうです。放牧が続けられると、毒や刺(とげ)のあるレンゲツツジやメギは牛や馬に食べられず、草原の中心に残され群落を形成します。放牧が行われなくなったためにササが繁茂し、草原が森林化し、放牧のために導入した外来植物が勢力拡大してしまいました。このようなミヤマシロチョウの棲息環境を維持するには、地元の方々の考え方を充分に反映させた保全計画をたてなくてはなりません。

皆様も群馬の山に出かけ、これらの天然記念物のチョウを観察する機会があるかもしれません。その時は、これらのチョウたちが人間と自然との間の、長い歴史と微妙なバランスの中で棲息していることを思い出してください。いつまでもチョウと一緒に暮らすには、私たちは何をすべきか考えてみてください。



袈裟丸山の庚申草

こうしんそう

吉田 龍司

国の天然記念物「コウシンソウ」に初めて遭遇したのは、半世紀ほど前の足尾山地の庚申山である。登山に専念していて、その時はムシトリスミレぐらいの認識しかなく興味も湧かなかった。コウシンソウについては後に文献で、三好学により庚申山で1890年発見命名されて1952年(昭和27年)に国の天然記念物に指定されたものと知った。関東北部の限られた地に分布し、他では男体山、女峰山、日光雲竜溪谷も知られている。

1986年6月中旬、関敏雄君の案内で桐生の金沢さんと3人で袈裟丸山の未知のルートを探勝した。その時に後袈裟の急峻な崖に咲くコウシンソウに再会した。ユキワリソウと共に咲き競う群落は、美しさに言葉を失うほどの感動であった。

袈裟丸山の「コウシンソウ」は既に須藤志成幸氏によって前袈裟で発見されていたが、この後袈裟の場所は、盗掘の危険から公開しないことを三人で申し合わせた。

一度は再訪したが、その後は10年以上訪れていない。桃源郷のようなあの地は今も顕在であろうか。もう一度行つて確認したいと考える今日この頃である。

コウシンソウはタヌキモ科ムシトリスミレ属の植物で、学名はピングイックラ・ラモサ(属名は油分の多い葉を持つ、種小名は分枝した)という。関東地方北部の限られた地に分布することは既に述べた。特殊な分布域の植物ゆえ、絶滅の危機に晒されている。

生育地は山地の垂直な岩壁で常に霧が流れ、夏でも25℃を上回ることのない環境を好む。草丈は3〜8cmで、近縁のムシトリスミレに似るが、花はそれより一回り小さく色もやや薄い。花茎はよく分岐する特徴がある。ロゼット状の葉は直径約3cm。密生した腺毛から粘液を出して捕虫する食虫植物である。萼は5



コウシンソウ

裂し、花冠の先が広がるのが特徴である。チャボセキショウ、コハリスゲ、ウラベニダイモンジソウ、ユキワリソウなどの植物に混じり生育するが、庚申山では苔に付着する個体が剥離落下しているのを確認した。環境省評価は「絶滅危惧Ⅱ類」。因みに群馬県評価は「希少」である。危機的植物で個体が増えることはあまり望めない環境にあると思う。

私は1996年から、首都圏の植物愛好者を対象にした植物探訪ツアーのガイドを勤めてきたが、コウシンソウについてはこのような現状を踏まえて、2006年以降は現地案内を控えている。

下郷の大クワ

里見 哲夫

渋川市下郷一二七四番地に「下郷の大クワ」の県天然記念物がある。『ぐんまの巨樹巨木ガイド』によると『幹は落雷で二つに裂け、両幹とも根元から空洞になっているが樹勢は盛ん。品種はヌマガギの類で「薄根のクワ」に次ぐ大きさ』とある。同地はもともと周辺に余裕があつた場所と思われるが、現在は家屋や道路

も走る所となって、環境が大きく変化している。伸びてきた枝が、種々と危険だということとで、許可申請をだして一部切り取ったことがある。時代が経過すると色々な問題が出てくるものである。何れにしろクワの巨木として貴重なものである。県内には「下郷の大クワ」に匹敵するものとして、一つは北毛の千葉村少年自然の屋敷地内に、もう一つは上野村白井にあるが何れも見事なものである。

クワといえば養蚕の飼育上大切な植物である。過去を振り返ってみると、群馬県は全国に誇る養蚕県であって、江戸の後期より昭和中期にかけては養蚕が盛んであった。『上毛かるた』にも「繭と生糸は日本一」とあり、養蚕に関係する札が併せて5枚もみられることは、養蚕を象徴するものである。それだけに県内には何処に行ってもクワ畑が見られた。クワの栽培も地域によって仕立て方が異なり、低刈り、中刈り、高刈りと異なっているのがみられ、その地域の景観の違いを見ることも出来た。しかし、高木のクワは前述の栽培方法とは違って、主に山間地の斜面等のクワ畑の隅に植えられていたものである。クワ畑を霜害から守る役目を果たし、一方、木に登って枝を切り落として養蚕にも使っていたと、現地

の古老から聞いたことがある。現在は、養蚕専門農業家は皆無、養蚕を副業としていた農家も激減して、養蚕をしているのが珍しいほどになってしまった。クワ畑の放置も目立っている。昔から養蚕に使った「大クワ」は、養蚕の歴史を語るうえでも大切な存在であり、渋川の「下郷の大クワ」が天然記念物指定になったのもその大きな理由でもある。新聞によると富岡製糸場を含む遺産群を四遺産にしようと、ユネスコに貴重な世界遺産候補として推薦書の提出準備が進められていると書かれている。クワも重要な遺産であり、注目すべきものは保全に努めたいものである。



瀬林の漣痕

飯島 静男

多野郡神流町瀬林にある。神ヶ原から、間物沢の流れに沿って、国道が通り、その道端にある。幅10m、高さ12mほどの岩壁、岩板を

立てかけたかのような平らな面の全体に、砂紋状のレリーフが浮き出ている。各一個は手のひらサイズで、それが魚のうろこのように連なっている。

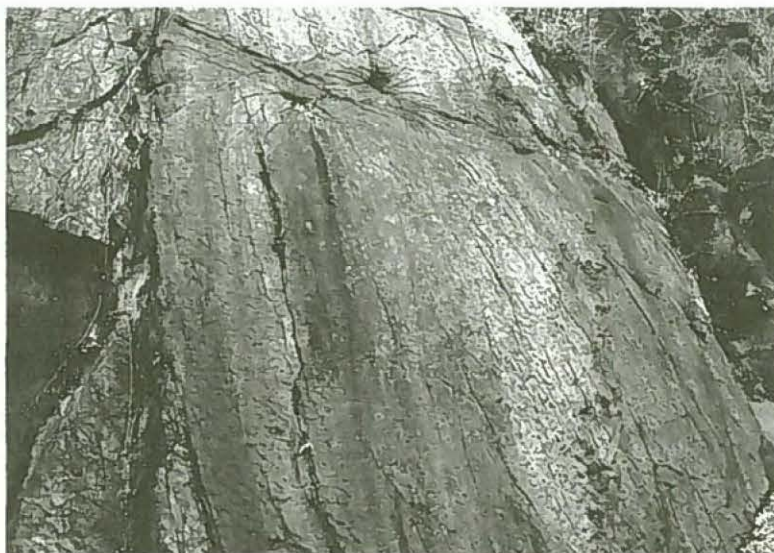
この岩は砂岩で、壁面は地層面である。レリーフは砂岩層堆積時の浅い水の流れによって生じた砂紋そのもので、地層面に保存されたそれは地質学では漣痕れんこんと呼ばれる。

天然記念物指定の経緯

一九五三年新道開設時に露頭出現。その後の崩壊で、漣痕面が大規模に露出した。一九五七年地質研究グループが発見し、翌年、研究発表した。一九六五年に文化財としての意義が認められて、県天然記念物に指定される。

十石峠から志賀坂峠を通り、秩父方面にかけて、中生代白亜紀の地層が分布する。南北両側にはより古い地層（昔は古生層と考えられていた）が分布しており、それには含まれた狭長な溝状の地帯なため、山中部溝帯と呼ばれる。山中はこの付近の古名、山中領に由来する。

瀬林は山中部溝帯の中ほどにあり、付近で貝化石、植物化石などが多産し、アンモナイトも見つかっている。貝化石の種類から淡水と汽水のまじる、河口のような古環境、地層の重なり方から三角州というように、具体的



瀬林の漣痕

に解明が進んでいる。

漣痕は大部分舌状漣痕で、これは水深数cmのごく浅い所で、水の流れによってできることが、実験的に考察されている。山中地溝帯の他の場所にも漣痕は認められるが、当地のものがいちばん規模が大きい。舌状漣痕の非対称形から、崖面の上方から下方への水の流れ、地層面を水平に戻せば、北から南への流向が推定されるが、中生代ならば日本海拡大

以前なので、大陸と陸続きに復原したうえで考えねばならない。山中白亜紀層の砂岩の重鉱物粒子の種類から、その起源を朝鮮半島に求めている研究もある。

恐竜の足跡

一九八五年に瀬林のさざなみ岩に恐竜の化石発見のニュースが流れた。発見という言葉のニュアンスは、何も無い所から見つけ出す響きがあり、先行研究者の懐疑的コメントは理解できた。

新発見者の主張するところは、いくつかあるくぼみを群として計測し、グループごとにそれぞれ一定の中のように、規則的間隔で列んでいることから、成因は足跡と考えるのがいちばん合理的である、との結論である。したがって、一個一個のくぼみについて、誰もが足跡と認めるような、明瞭な形をしたものはひとつもないのである。だから、最近急速の進歩をして、学名まで付いているような各種動物の生痕などとは比べると、説得力が弱い。とはいえ、同時代の韓国の恐竜の足跡やアメリカ合衆国の恐竜居住地遺跡などを参考に、まず足跡にちがいない程度の共通認識にはいたっている。白亜紀の地層だから、大型陸上動物は恐竜しかない。一九九六年中里

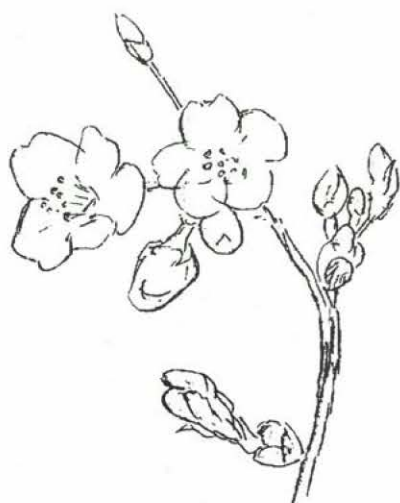
村(当時)の天然記念物に指定された。

崖面上方の大きいくぼみ三〜四個は大型の重い恐竜の歩いた跡で、右上方から下部にかけて斜めの漣痕の乱れは、二種の小型恐竜が走った(?)跡とされている。

発見のきっかけ

小島郁生氏の著書によれば、同氏が(国内で)恐竜の足跡があるとすれば、山中地溝帯なんだがなあと言ったことで、松川正樹氏がさざなみ岩を思い浮かべたという。偶然出くわすなどと受け身なことではなく、積極的に追求して得た成果なのであろう。

瀬林の漣痕露頭の裏の沢で恐竜の骨が発見され、一九八四年に発表された。当初尾椎骨とされたが、その後胸椎骨に訂正された。骨発見が背中を押したにちがいない。



植物歳時記 (57)

ワラビ (蕨)

吉田 龍司

ワラビ野となりて大地の息吹かな 龍司

昨年春秋2回、赤城山覚満淵の笹刈り作戦に参加した。ここは県立公園に指定され、重要な湿原でありながら、その保全については今まであまり手が入られなかったため、ミヤコザサを始めヤマドリゼンマイ、ワラビの侵入が顕著で遷移を早める結果となった。このままだと湿原植物はササ等により被覆され、

湿原としての機能が損なわれてしまう。その危機感から笹刈り作戦を企て趣意書を草稿した。そして「赤城山の自然保護活動推進協議会(小暮市郎代表)」の立上げに参画、実行に到った。当日は笹刈りの趣旨に賛同する参加者が100人ほど集まった。そして笹刈りの効果



として、最近見られなくなった植物も復活回復の兆しがあり、誠に嬉しい限りである。

この活動が是非とも継続されることを強く望むものである。そして湿原の保全活動から見えて、影響のあるワラビについて触れて見たい。

ワラビはプデリディウム アキリヌム ラティウスクルム(驚のような)という学名である。かつてはイノモトソウ科に分類されていたが、現在はコバノイシカグマ科に編入されたワラビ属のシダ植物である。

ワラビは漢字では蕨と書き、厥と同じ音で「ケツ、クツ」と読む形成文字。「艸冠」に厥という漢字は、「縮んで丸まっている」という意味だという。ワラビの生態をよく表している標記である。

ワラビの語源は、早春に芽を出す形が藁火の燃えだす様に似ている説からというが、これは『古今集』に「煙立ち燃ゆとも見えぬ草の葉を誰かわらびと名づけそめけむ」の和歌からの説と同一でこじ付けであろう。ワラビは「カラミ」(茎実||茎肉)から変ったと見るのが妥当であり、茎が食用になることへの着眼の名だと丸山利雄氏は『しなの植物考』で述べている。私もこの説に賛同する。

昔からワラビは山菜として誰にでも知られ

るシダ植物であり、「ワラビ採り」は春の風物詩である。

「山で美味しいものに、ウケラ(オケラ)とトキ(ツリガネニンジン)。里で美味しいものは茄子、南瓜。まだ美味しい独活、蕨。」と謡われるポピュラーな植物で、誰にも知られている。それ故か、万葉以降和歌、俳句の世界ではたくさん詠われてきた。

・石激る垂水の上のさ蕨の

萌え出る春になるにけるかも

万葉集 卷第八、1418 志貴皇子

・煙たち燃ゆとも見えぬ草の葉を

誰か蕨と名づけそめけむ

古今和歌集 卷十、453 真静法師

・折りもてるわらびしおれて暮れ遅し 蕨村

・鎌倉の見える山なりわらびとる 一茶

・朝な夕な食いつつ心楽しかり

信濃のわらび陸奥のわらび 斎藤茂吉

ワラビは山菜として広く利用されてきた。

地上からスクと立ち上った若芽「茎」を採る。

他の山菜やキノコと違って見間違えることのない唯一の山菜であろう。山野で他の植物が活動する前に、いち早く地上部を擡げる。つまり先駆植物の最たるものである。山菜としては展葉する前の、恰も拳をまるめたような

莖を根際から手折る。折れない莖は筋張って食用にはならない。

ワラビを食用とする民族は日本の他には中国、朝鮮以外には無く、中国、ロシアから殆ど輸入し、その量はわが国の生産量の数倍だという。

以前ヒマラヤトレッキングに出掛けた折り、まるで畑のようなワラビ原に出くわしたことがあった。そこで私は持ち前のお節的な性分から、「邦人ツアー客向けに採取して食卓に出したら喜ばれるよ」と現地ガイドに言い、莖の太さが色鉛筆大もあるワラビを手折って見たが、どこを折っても千切れない。何本も試みてみたがどれも同じであった。これでは筋張って食用にならないので、あっさり私の提案は引込めざるを得なかった。ネパールのワラビは、種が違うのであろうか、それとも生育地の日当たりが良すぎて筋張ってしまった結果なのか、今もって私には納得がいかない。

ワラビは採取してもそのままでは食べられない。ワラビには樹脂に似た成分があつてこれを鹸化するため水に流す必要がある。薬灰の水に一晚浸けて灰汁抜きをする。薬灰は手に入り難いので重曹を使用する。灰汁抜きが不十分だとビタミンB1を破壊する酵素アノイ

リナーゼと、発癌物質であるブタキロサイドにより多食すると癌になると言われる。生で塩漬したものや未加熱のものは注意が必要だ。これは1940年代に、牛馬、羊などの家畜がワラビ摂取によって中毒し、骨髄障害や血尿症が発生して畜産農家で大問題になった。これ以降ワラビは発癌につながる山菜として異端視されがちだが、その年初めて口にする「春が来た」と実感するのがワラビである。

山菜以外の利用では、ワラビの根茎には澱粉があり、食用や糊として利用されてきた。ワラビ餅は今でも観光地の土産物として見かけるが、糊は今でも利用されているのである。昔は油障子や唐傘などの接着剤として、なくてはならないものであった。

『日本植物方言集成』によると、ワラビの方言は33採録されている。植物が成長しきって繁茂することを「ほける」という。これは「ほうけ」で「蓬々」の訳で古くは「蓬々」と言つたようである。それが「ほどろ」に変わって専らワラビの「ほけた」ものの呼び名に充てられた。従つて「ほたる」、「ほーろ」、「ほでら」、「ぼとろ」、など、これ等に類した方言は左記地方の方言から伺い知れる。

あおくさ 青森（北津軽）、かぐま 青森（上北）、かね 岡山（備前）、かんずり 山口（豊浦）、こーろぎ 島根（石見）、しずらそー（周防）、しだ 島根（美濃）、しどけ 土佐高知、しよーで 新潟（古志）、せきだぐさ 木曾、ぜんざわらび 長野（下伊那）、そーじもの 鳥取（東伯）、たまぎり 佐渡、つば 島根（隠岐島）、はしわらび 福井（今立）、ふすべ 秋田（鹿角）、ほーろ 和歌山（有田）、ほた 岩手 秋田、ほだ 岩手（盛岡）秋田、ほたる 長野（下水内）、ほたるば 山形（村山）、ほたるば 山形（北村山）、ほつろ 京都（竹野・中）、ぼて 長野（佐久）、ほでら 長野（諏訪）、ほとら 新潟（西頸城）、ほとろ 和歌山（有田）、ほどろ 新潟（西頸城）、和歌山（日高）、よめのさい 三重（伊勢）、わらびな 島根（隠岐島）、香川 長崎、わらべ 兵庫 福岡 長崎 熊本 鹿児島、わらべな 徳島 香川、わるび 千葉（夷隅）、

・誕生花 2月26日

・花言葉 揺るがぬ愛

今春の赤城山覚満淵「笹刈り作戦」は5月20日である。多くの方の参加をお待ちしたい。この日は偶然なことに私の誕生日である。

図鑑の内と外

植物私記 ③③

佐鳥 英雄

コナラ

生きていると次々と疑問が湧く……というこ
とは、このエッセイでも度々記してきました。

今はインターネットの時代なので、呼び出し
てみれば（クリックというようです）、数秒で
片づくことも多いようですが、それができな
い私は、疑問のままとなる場合がほとんどで
す。たまには人に頼んでクリックしてもらい
ます。たとえば、万騎峠という峠。これは、
群馬と長野の県境にあるのだ……と思い込んで
いて、丁寧に探してみたのですが、見つかり
ません。清水（シズヨ）さんに頼むと、間もな
くコピーが届きました。長野原町と東吾妻町
の境にあるということで、峠の看板まで写った
写真つきでした。私はバンキと読んでいまし
たが、まんき……と仮名がふつてありました。
地名などは正確に読めない場合が多いですね。
桐生にも沢山あります。軍場・猿石・閉籠里
（イクサバ・セリシ・トズロウリ）近くの太

田市には只上があります。タダカリです。私
の雑学・考証癖は、国語教師が長く、加えて
植物分類などという些事？に首をつっこんだ
せいなのか、生まれつきなのか、現代人の特
徴なのか、よく分からないのですが、こうい
う地名とか人名・物の名とかに自分で呆れる
ほど興味が湧くので、困っています。

たとえば、
うどんやそばを水から揚げる時、箸に取り
やすく汁椀に入れやすくするためにちよつと
手からげます。その1つ1つを私の育った
群馬郡国府村冷水（ヒヤミズ）ではヒトチョッ
ポ、フタチョッポと呼びました。（冷水は今
高崎市冷水町）隣の金古町で育った義兄もそ
う呼びますので、少し広い方言のようです。
ところが、これが、みどり市笠懸町ではヒトテ
ガラ。桐生市も同じです。テガラは手に絡め
るからでしょう。でも、チョッポはむつかしい
ので解けません。ところが、去年の12月頃のコ
と、NHKの番組で信州蓼科のそばの話が出
てきて、ボッチとか。ボッチは一人ボッチ、
藁ボッチ、だいだらばつちのボッチでしょう
よ。ボッチとならないヤチボウズなどもあり
ます。ならば、チョッポも解けたでしょう。
ヒトツボッチ↓ヒトツチッポ↓ヒトチョッポ

……ではないか。時間とお金があれば蓼科へ飛
んで、数えるときはヒトツボッチか、フタツ
ボッチ……かどうか、確かめたいのですが、すぐ
にはできません。もつとも、こういう私の粘り
づよい努力も、〈上州方言集〉とか〈上州弁の
研究〉とか、〈うどん、そばの雑学〉とかで、
クリックすればすぐ出ますよ……と言われそう
で、不安です。ただ、ここで私の主張の1つ
を記しておきますと、このような、読みかた
が幾通りもできたり、難読の場合、仮名をつ
けておくことを、もう少しやるべきだと私は
考えます。滅多やたらルビをつけるのは大嫌
いですけれど。

私の記憶では、朝鮮の姓は3百。中国では
3千、日本は3万ではなく30万とか。スーパ
ーのレジに産形さんを見つけました。桐生市の
電話帳で見ると、生方が多く、ついで生形。
一軒だけ産形さんがありました。私が知って
るのでは空さんとか髭右近さんとか。（ソラ、
ヒゲウコン）、もう忘れましたが、八月稲とか
書いて、ホヅミさんとかいろいろあります。

いま、私がこの一文を執筆中のいま、12年
2月10日前後、私の庭にはフラサバソウの双
葉がびっしり生えています。放射能を心配し
たカミさんが、落葉を除いたのでよい目に

立ちます。辺りの土を少しじると、すぐ生

でした。

えても来ます。このタネは、太田市の丸山(たぶん群馬で最初の基地)から持ち込んだのですが、夏中草取りをしないので、好き勝手に暮らしているのです。私が奇異に思うのは、この草、冬の間中は基本的に双葉ですごしているということ。同属のオオイヌノフグリと対照的です。オオイヌノフグリは夏の終わりがら発芽し、どんどん育ち、冬でも花をつけています。両種ともヨーロッパ原産の越年草ですが、越年の仕方がずいぶん違います。(タチイヌノフグリは桐生で見ているかぎり一年草)両種の越年の仕方の違いに注目すれば、同じヨーロッパ産といっても、両種の原産地は少しずれるのではないだろうか。などと、私は考えるのです。私自身はヨーロッパの旅でオオイヌノフグリは幾度も見えますが、フラサバソウの記憶はありません。

私が主宰している植物教室の、昔の会員であつた皆川(陽子)さんが、何かの折、へ冬の山径を辿ると、ドングリの実が真っ赤に色づいていてキレイです。と書いていました。人はそんな小さなものにも、ふと感銘することがあります。へ人の見ぬ小さな草にふさはしさはれ小さな花の咲く春は太塚楠緒子の歌

ところで、今年の冬(2012年)八王子丘

陵の麓を歩きながら、地面に敷きつめたコナラの実に足をとめました。この冬はことさらに冷え込むので、高齢のことにいささか思いをやつて、私は例の朝の散歩を少しやめようかなどと考えているところでした。散ったコナラの実のうちの幾つか頭の先から根を出して、赤い子葉が覗くのもありました。日照の関係か、黄緑色もあります。もしもこれだけの実が全部発芽するのであれば、地面は苗で埋まるはずだけど、そういう情景は見えていない。むしろ大部分が発芽しないで終わってゆく。まさか、始めから発芽しない実とする実を作るのではないとしたら。私は愚かなことを考えていました。気の毒だけど、少し皮を剥いてみよう。みると、子葉がカビているのが多く、虫喰いのものなど。石の上などに落ちて発芽できないものもありますが、80〜90%は発芽力を失っているようでした。石の上つて、根性がある奴は発芽を始めることが考えられますが、コナラは信条が違うのか、そういう奴は見当たりません。土にうまく頭(尻が正しいか)を当てられた者だけが根を伸ばしています。2月の初めで、根は1〜2cmの

ものから、10cmほどのものもあります。長い根は髭根を持っています。径2mmくらいの根は白くはかないのですが、コナラの肌を思わせます。私はそんなことにやや感銘しながら、ところで。と、ふと思ひ出していました。コナラがこうして冬の間、せつせと春のいそぎをしているのに、同じ仲間のクヌギ・ミズナラ・シラカシ・アラカシどもは何もしていないのだった。ちうか。私はすぐ近くのシラカシとウラジロガシのある神社(三島神社)へ行ってみました。ここは、よく庭を掃くオバサンがいるのですが、見当たりません。ウラジロガシは1本だけなのか、ここでは実を拾った記憶がなく、シラカシの下に立ったのですが、やはり敷きつめたような実の、その1つも、発芽の気配がありません。思えば何10年、植物観察を続けながら、シラカシ1つの発芽の様子さえ見えない自分に呆れたりするのでした。いつ頃から根が伸び始め、いつ若葉を立ててゆくのか。今年はしっかり見届けておこう。などと、思いもしたのでした。また、考えてみますと、図鑑などの多くが、種子のことまでで終わっていて、余程でないと、その発芽の様子まで及んでいません。切りもない。と言われればそうなのですが、結構大切

で面白い分野のことではないでしょうか。

やや唐突ですが、小林秀雄を持ち出しますと、この人は「歴史とは思いだ」と主張しました。史料なんか富士山よりも積み上げても、そんなものに価値はない。それを生きた人々の心が歴史だ……と。半分真理ですが、半分ウソでしょう。史料もまた歴史です。植物学も同じこと。図鑑、標本を含めた史料とそれを生きた植物たちの心と。

コナラに戻りますと、コナラがせっせと春の用意をするのに、仲間知らん顔。こういう事実を急いで、つまり知的に処理しますとへ要するにこの世はみんな得手勝手さ。つまり民主主義。世の存在そのものが民主主義を原理として成立している。面白いことです。「なに？、それじゃ能率が悪いって……能率が欲しければ軍隊式ってのがあろうでしょう。そいつはいつも喝采と歓呼の声付きでやってきます。なんとスバラシイ！」私の考えすぎでしょうか。そんな現象が近頃見え隠れしています。

コナラといえば、私の好きな李賀の詩の一節を記しておきましょう。

裊々青襟道

(じょうじょうたりせいきのみち。
若葉がやわらかくそよぐナラの林の

道を行く喜びは……)

はじめに生きていると疑問が次々と記しました。すでに記したものもあるかも知れませんが、近頃のを少し記しておきましょう。

- ① 白龍に羽衣を奪われた天人は水着姿だったのかどうか……心配。
- ② 魚などに、北海道産とか書いてありますが、北海道で加工しました……だけのものも含めるのかどうか。
- ③ 裏日本の豪雪。雪国は雪下ろしが大変とのこと。どうして、トンガリ屋根の家を造らないのだろうか……。
- ④ なぜ♂♀とも角があったり、♂しか角がなかったりするのだろうか。
- ⑤ 原発の事故処理で兆の金がかかるのでしょうか。それでも消えない放射能とか。どうして政府や東電さんは、その金で、太陽光発電の支援をしないのか。五百万円かかるどころ、自己負担は五万円ですとか……。

〈注〉①のQの補足として、

「二糸まとわぬ」という成句がありますが、この一糸は一枚の服の意味だといえます。だって、糸一本が文字どおりでは、ほとんど意味をなさないのでしょう。なお、参考ま

でに記しますと、私の植物教室でチョッポを話題にしてみましたら、テガラは足利でも言うとか、チョッポでなくポツチョだとかいりいろいろありました。



群馬の地質

年の始めに衿を正す

飯島 静男

戦前の博物学雑誌に、小林学さんが「地質見学地としての群馬県」の記事を寄せています。その中に茶白山溶岩流と落合溶岩流の関係という項が図入りであり、おや？と思つて、元日に倉洲町落合の烏川べりの崖に行ってみました。

戦前は溶結凝灰岩の概念がなかったので、溶岩とされていましたが、茶白山層のことです。秋間と里見の境界稜線に連続分布するほ

か、その延長は湯殿山や落合付近の烏川沿岸にもあります。藤本治義先生と小林学さんの共著論文では、それらとは別に、上流側に小規模な溶岩流があると記述しています。

その三〇年後の秋間団体研究グループの論文では、落合溶岩流は茶臼山溶結凝灰岩と同じ岩石であると書かれております。先頃の倉瀬村誌では、よくもそう思い込んでいました。

行ってみると原著の通り、別の安山岩塊群が、溶結凝灰岩層の上位に累重していました。

現在の知識からは、溶岩流ではなくて、大規模岩屑なだれ堆積物中の岩塊群と解すべきものですが、昔の観察は正確でした。

残された自然の中で (156)

観音山鳥日誌⑤

谷畑 藤男

ニュウナイスズメ

ニュウナイスズメは本州中部以北の多雪地帯の広葉樹林の樹洞で繁殖し、冬季は温暖地の農耕地や河原に群れで過ごす。スズメより小型で雌雄の体色が異なる。雄は赤茶色の頭部でスズメに似るが、雌は黄色味を帯びた頭

部で白い眉斑もあり別種に見える。

十数年前4月上旬の観音山探鳥会、満開のソメイヨシノの子房をついばむニュウナイスズメの小群れを見た。蜜を得るための花食はスズメでは知られていたが、ニュウナイスズメが同じ行動をとることに興味を持った。観音山でのニュウナイスズメの記録は少ないので、北へ渡る個体が桜花に立ち寄ったと考えた。

碓氷川と鍋川に挟まれ、妙義山麓から東へ



ニュウナイスズメ

舌状にのびた丘陵先端に観音山は位置している。200〜300mの標高であるが、V地谷の急峻な地形や水田が入り組む谷津田地形そして畑や牧場がある台地状の緩斜面など多様な地形を見ることが出来る。ニュウナイスズメの越冬群を見つけたのは、キャンプ場に隣接する「みやま養護学校」付近の藪。一帯は台地上にあり、キャンプ場のある荒久沢の急峻な谷と異なり、耕地・観光農園・牧場・集落がある。観光地の「展望花の丘」も、ここにある。

ニュウナイスズメは10月下旬に渡来し、耕地や集落付近で越冬する。藤岡市の観察(2000谷畑)では、開けた耕地に渡来し、群れで行動する。畑で採餌し驚くといつせいに飛び立ち付近の電線に並んで止まる。観音山では住宅や牧場のある台地上に渡来し、牧場内で糞殻をついばむ群れを見る。電線によく並んで止まるのは藤岡市と同じである。地元の方の話では30年以上前からニュウナイスズメは冬になると飛来している。

正確な渡去時期を知りたくて4月こまめに調査したが、11年4月24日、まだ50羽の群れ確認。5月1日、牧場付近の電線で15羽を終確認した。観音山探鳥会でニュウナイスズメを見た桜木は谷を隔てた「のぞみの園」内で、越

冬地から1.5kmの距離である。4月上旬という時期を考えると、渡り時の通過個体というより採餌のため飛来した可能性が高い。

参考文献

2000 谷畑藤男 ニュウナイスズメ

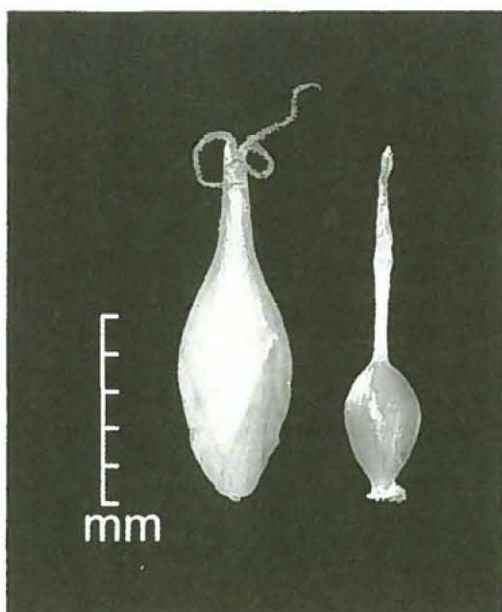
群馬の自然116号

植物をミクロで見る (5)

ウマスゲ

青木 雅夫

3月の声を聞くとウメ開花の話題がちらほら出てきますが、水辺ではスゲ属が芽を出し始めます。多々良沼の縁や谷田川河床などには、このウマスゲが群生しています。中型の



スゲで、雄小穂が長い柄をつけて飛び出ているのが目立ちます。ミヤマシラスゲ節で、カサスゲやヤワラスゲがこの仲間に入ります。ウマスゲの果胞は写真にあるように、口部が2つに分かれ(2歯)そこから、3岐した雌しべが飛び出しています。瘦果は果胞にゆるく包まれているので、果胞を剥ぐと中には3mmほどの3稜形の瘦果がしっかりした柱頭を付けたまま出てきます。

アベマキの分布に一考

里見 哲夫

ブナ科コナラ属のアベマキ(一名コルクガシワ)の分布は、山形県、新潟県、長野県、岐阜県以西であることが報じられている。

『群馬県植物誌』には記載されていないが、その後、1977年に桐生市吾妻山松沢沿いに30本程が生えていることが『桐生市植物誌』に書かれている。自生については検討の必要があるとしている。2011年1月、指導委員会会長の神宮 開氏と高崎市観音山と染料植物園の中間地点で幼木・成木を含めて10本ほどのアベマキを見つけた。林業関係者の話

だと、時によりクヌギ苗の中に混じっていることもあるとのことであった。半信半疑、そこで他県の様子を調べたところ、隣県の『新潟県樹木図鑑』には記載がある。詳細が分らないし苗木に混じって入った疑いもある。『山形県植物誌』には2件の天然記念物があり、文中に本県には自生する植物ではないと付記されていることなどから見ると、両県の自生はどうも疑わしい。近県については埼玉県と神奈川県植物誌には記載がない。前述したようにアベマキの分布は長野県、岐阜県以西であろうか。たまたま機会があつて2012年1月、染料植物園に接する国有林内を神宮氏と調べたところ、目通り周292cm、250cm、240cmの巨木がアズマネザサの藪の中にあるのを見つけた。樹高もかなりの高さである。西側には目通り周90cm程の木が数本見られる。国有林と接する同園内にも4・5本あるが、どうも植えたものではないらしい。今後は更に周辺一帯の調査を進めるなどして、どの範囲に分布しているかを確かめる必要がある。ここに、アベマキの情報を提供して自生かどうかの教えを請うものである。種々と小暮市郎氏にご配慮を戴いていることに感謝するところである。また、甘楽町の里山では、シキミ、

ミヤマシキミの群生やウラジロ群落、ハイホラゴケ、ハカタシダ、オニカナワラビ、ホシダ、イノデ、アイアスカイノデ等を確認している。イタビカズラやツルグミも多い。併せて、里山の調査の必要さを感じているところである。

タヌキは種子散布者？

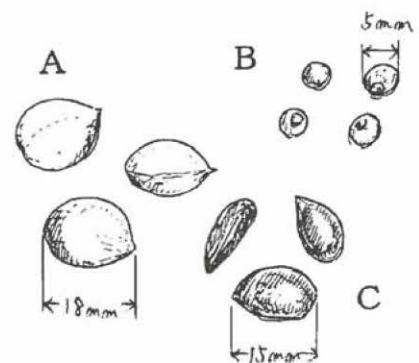
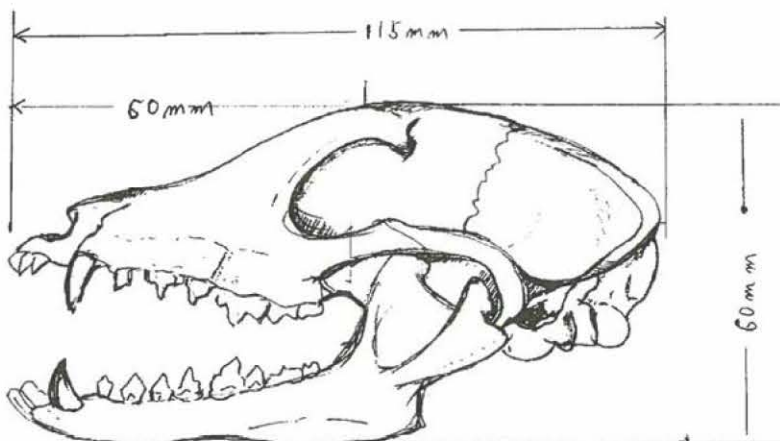
谷畑 藤男

十二月初旬、観音山ヒノキ林の山道でタヌキの共同トイレを見つけました。タヌキは家族が同じ場所で排便をすることが知られています。糞の山は雨で洗われ、白くて丸い粒々がたくさん見られました。糞塊の一部を持ち帰り、水で洗い内容物を取り出しました。固形物のすべてが3種のタネでした。白く丸いのはイチヨウ(A)、こげ茶で扁平な種子はマメガキ(C)でした。小さく球形の種子(B)は今のところ不明です。(小暮市郎先生に鑑定をお願いしました)

タヌキは雑食ですが、種子は破砕できずそのまま排泄することがわかりました。特にイチヨウの臭い果実を消化吸収し、人間にとっておいしい種子(銀杏)を捨てています。タヌ

キの頭骨を関敏雄さんから借りてスケッチしました。歯はすべて尖っていて、硬い種子は破砕できないことがわかりました。銀杏の表面に傷がある理由も納得できました。

イチヨウにとって種子である銀杏を食べってしまう人間より、果実を食べ種子を運び排泄するタヌキの方がありがたい存在です。さらに共同トイレ付近にはイチヨウの木はありません。タヌキは行動範囲が広いということも糞は教えてくれました。



平成24年度 「自然観察会」

主催 NPO法人群馬県自然保護連盟
共催 群馬県環境森林部自然環境課

	場 所	開 催 日 時	対 象	内 容 ・ テ ー マ	集 合 場 所	定 員
①	赤城長七郎山から おとぎの森	6月10日(日) 9時～15時	一 般	新緑の森でシロヤシオの花や春の 息吹を堪能しよう	赤城山小沼 駐車場(前橋市富士見町)	30名
②	群馬県林業試験場	7月22日(日) 9時～14時	児童と 保護者	林地の原で虫を捕まえて観察しよう 野鳥病院で鳥の見学	群馬県林業試験場(北群馬郡榛東村新井2935)	30組
③	三 波 川	8月12日(日) 9時～14時	児童と 保護者	川遊びと、水生生物、魚の観察、 河川敷で昆虫、カエル等の観察	小平河川公園 駐車場(藤岡市三波川)	20組
④	ブナ平から玉原温泉	8月26日(日) 9時～15時	一 般	ブナ林と湿原植物を観察しよう	玉原中心広場 駐車場(沼田市玉原大駐車場)	30名
⑤	谷川岳「一ノ倉沢」 と 湯 檜 苗 川	9月2日(日) 9時～15時	一 般	日本三大岩壁「一ノ倉沢」の景観と 湯檜苗川のブナ林を観察しよう	土合橋付近 大駐車場(みなかみ町土合)	30名
⑥	ワ ラ ビ 平 高 倉 山	10月21日(日) 9時～15時	一 般	紅葉の秘密を探ろう	ワラビ平 駐車場(高崎市倉沢町川瀬27-10)	30名
⑦	伊 香 保 森 林 公 園 オ ン マ 谷	11月3日(土) 9時～15時	一 般	紅葉を訪ね山道を散策しよう	榛名ヤセオネ峠 駐車場(旧有料道路料金所跡) (渋川市伊香保町)	30名

<注>

- ① 事前に申込が必要です。定員を超えた場合は先着順となります。
- ② ハイキングの出来る服装(動きやすい)、弁当、飲み物、雨具。双眼鏡やルーペがあると便利です。
朝から雨の場合は中止する場合があります。連絡は携帯電話へ(090-4833-5789)
- ③ 「三波川」は浅い川に入ります。川遊びのできる服装、運動靴でご参加ください。
- ④ 参加者は資料代、傷害保険に加入するため参加費(小学生以上一人300円)が必要です。

平成24年度 「自然環境保全地域」の自然観察と清掃活動

共催 群馬県環境森林部自然環境課
実施 NPO法人群馬県自然保護連盟

	場 所	開 催 日 時	テ ー マ	集 合 場 所	定 員
①	鳩 神 山	5月6日(日) 8時～15時	カッコソウやナルカミスミレを探してみよう	駒形登山口 林道奥駐車場(桐生市川内町)	15名
②	荒 山 高 原 荒 山	5月27日(日) 9時～15時	赤城山のツツジや野鳥を探索しよう	木の家ローラー滑り台駐車場[林道・鍋割相吉線] (前橋市富士見町賀輪)	30名
③	相 馬 山 黒 岩	6月3日(日) 9時～15時	春の動植物の息吹に感じてみよう	榛名ヤセオネ峠駐車場[相馬山登山口付近] (渋川市伊香保町)	30名
④	鈴 ケ 岳	9月16日(日) 9時～15時	赤城山の巨石と展望を楽しもう	赤城町深山キャンプ場駐車場(渋川市赤城町深山)	20名
⑤	鍋 割 高 原 鍋 割 山	9月30日(日) 9時～15時	秋の花を楽しみ、 山頂からスカイツリーを探そう	木の家ローラー滑り台駐車場[林道・鍋割相吉線] (前橋市富士見町賀輪)→鍋割高原登山口へ移動	20名

<注>

- ① 事前に電話でお申込みください。電話027-324-5706 (携帯090-4833-5789)
参加希望者が定員を超える場合は先着順となります。
- ② 参加費は無料です。
参加者は全員傷害保険に加入していただきます。(参加費の費用負担はありません)
- ③ ザックに雨具、昼食、水筒等を入れて各自持参してください。
- ④ 軍手・ゴミ袋は群馬県自然保護連盟が用意します。朝から雨天の場合は中止いたします。

平成24年度 自然保護対策委員会 視察予定

場 所	月 日	時 間	集 合 場 所	備 考
叶山鉱業所 笠石探掘場	5月26日(土)	7:30出発	群馬県自然保護連盟 駐車場	園地の植物移植地を視察します
東京電力㈱ 西上武幹線現場	未 定		"	鉄塔建設地の周囲を視察します
ハッ場ダム工事事務所	未 定			

平成24年度 自然観察教室

開催日	開催場所	テ ー マ	時 間	コ ー ス ・ 歩 程	費 用
4月15日(日) 申込者多数の為 大型バス使用	坂戸山 634m (新潟県) 2009年/NHK大河ドラマ 「天地人」 直江兼続の舞台	カタクリの大群落と 上越国境展望の山旅 [早春季植物(カタクリ等) の咲き誇る花の山旅]	日帰り 出発 6:30 帰着 18:00 (雨天決行)	高崎(関越道)→六日町IC→R253→R17→ 六日町駅前→駐車場→坂戸山登山口→城坂 コース→桃の木平→坂戸山→小城→大城→ 栗師尾根コース→登山口→駐車場→五十沢 温泉→六日町IC→(関越道)高崎 歩程:約2時間 :家族向け初級	5,000円 40名
8月4日(土) ～5日(日) 中型バス使用	日本百名山・新日本百名山 乗鞍岳(中部国立公園) 3,026m(岐阜・長野県) 乗鞍岳は乗鞍スカイラインが 豊平まで開通し初心者でも楽 に剣ヶ峰に登れる至近な北ア ルプスの山です	高山植物の観察と山岳展望 イワギキョウ、シナノオトギリ、 イワツメクサ、チングルマ、 カンチコウゾリナ、ツサギギク、 トウヤクリンドウなど	1泊2日 出発 6:00 帰着 18:30 (雨天決行)	4日:高崎(上信越道・長野道) 松本IC→安房トンネル→豊平→乗鞍岳 →豊平→奥飛騨温泉郷福地温泉温泉荘投宿 5日:温泉荘→平湯→高山市内→安房トンネ ル→大王ワサビ農場→上信越道→松井田砂 越IC→高崎車庫	20,000円 25名

※ 会員のみ:要予約。往復とも貸切バスを利用します。詳細は申込みあり次第郵送します。

※ 集合場所:上信越道(バス) ※ 駐車場:群馬県自然保護連盟駐車場&東和銀行高崎東支店駐車場

事務局日誌(164)

12月20日	会報「群馬の自然・163冬」原稿編集局長渡し
12月21日	東電(株)西上武幹線工事計画報告・歳末挨拶
12月27日	24年度鳴神山清掃登山・工事関係者へ協力要請
12月28日	県鳥獣保護会議
12月28日	県自然環境課長中嶋氏通夜
12月28日	県自然環境課長中嶋氏葬儀
12月28日	ハッ場ダム建設所他新年挨拶
12月28日	会報「群馬の自然・163冬」校正、印刷所渡し
12月28日	ぐんま山の日記念フォトコンテスト審査委員会
12月28日	赤城山環境ガイドボランティア養成講座会議
12月28日	赤城山自然塾運営会議
12月28日	群馬県林業試験場 観察会会場使用依頼
12月28日	前橋市児童文化センター竣工祝賀式
12月28日	会報「群馬の自然・163冬」郵送
12月28日	県自然環境課「会報163冬」届け
12月28日	1月理事会 14名出席
12月28日	サンデンフォレスト「植物ガイド」編集
12月28日	事務所屋内配線切替え工事
12月28日	1月理事会議事録郵送
12月28日	サンデンフォレスト・行事打合せ
12月28日	群馬県野生生物調査・対策報告会
12月28日	赤城山覚満淵「ササ刈り作戦」打合会議
12月28日	県生涯学習センター「総会会場申込み」
12月28日	「まえばしパートナーシップ」担当課打合会議
12月28日	ぐんま山の日記念フォトコンテスト表彰式
12月28日	前橋市児童文化センター観察会資料届け
12月28日	秩父太平洋セメント(株) 視察打合せ
12月28日	会報編集打合せ(編集長)

事務局だより

24年度行事案を掲載しました。県委託事業の日程等は広報掲載の関係から、総会の議決を待たずに実施されます。ご了承ください。

・2月7日、前橋市教育委員会は社会教育活動功労者への感謝状贈呈式を中央公民館で行いました。本会から篠原豊氏、片山満秋氏、亀井健一氏の3名が表彰を受けられました。おめでとうございます。

「総会」のご案内

日時 5月19日(土)午前9時半～12時
場所 県生涯学習センター・第2研修室
住所 前橋市文京町2-20-22
電話 027-224-5700

※総会は規約により定足数が必要のため、出欠席ハガキ(委任状)を同封しました。準備の都合上、出欠席の如何を問わず必ずご返信をお願い致します。

赤城山覚満淵「ササ狩り作戦」

日時 5月20日(日)午前9時～12時
集合 赤城山ビジターセンター駐車場
皆様のご参加をお願い致します。詳細については事務局宛、お電話ください。

会費納入のお願い

会計年度は4月1日～翌年3月31日です。振替用紙を同封しました。皆様の力で自然保護活動の輪を広げていきたいと念じています。会費納入はお早めをお願い致します。

編集からのお願い

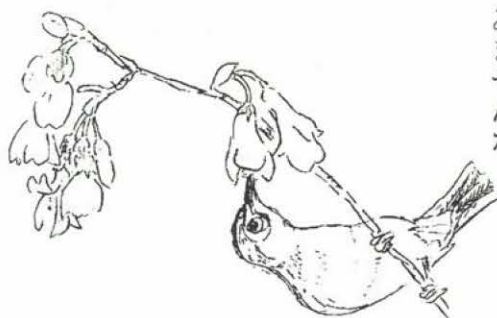
大地震からまもなく一年。日本列島と日本人の心がゆれ続けた一年でもありました。東北や日本海側は記録的な多雪、群馬県も寒さ厳しい冬でした。雪を避けて白鳥や雁が群馬まで南下して、例年渡来しない意外な湖沼で大型の水鳥を観察しました。

特集ではたくさんの方の原稿をいただき、動物・植物・地質各分野の「群馬の天然記念物」を紹介することができました。お世話になりました。本県にはまだ多くの天然記念物があります。今後も継続的に紹介できればと考えています。ご協力お願いします。

次号の特集は「ぐんま百名山の自然X・下仁田町の山①」を予定しています。対象は妙義山・大桁山・稲含山・小沢岳・御堂山・日暮山・物見山の七山です。原稿の締め切りは6月15日です。自然保護に関するご意見や観察記録もお待ちしています。事務所宛にお送り下さい。よろしくお願いします。

群馬の自然 164号

発行日 平成24年4月
発行人 NPO群馬県自然保護連盟
編集人 谷畑藤男
発行所 群馬県自然保護連盟事務所
〒370-0046
高崎市江木町610-10
電話 027-324-5706
携帯 090-4833-5789
振替 00320-6-13239
会費 2,000円(年間)



下仁田町には、群馬百名山はまだ四山(荒船山・物語山・鹿岳・四つ又山)あります。冬号で「南牧・下仁田の山」として特集したいと思います。低山ですが個性的な山々です。新緑のハイキングにはおすすすめです。思い出を記録に残してみませんか。